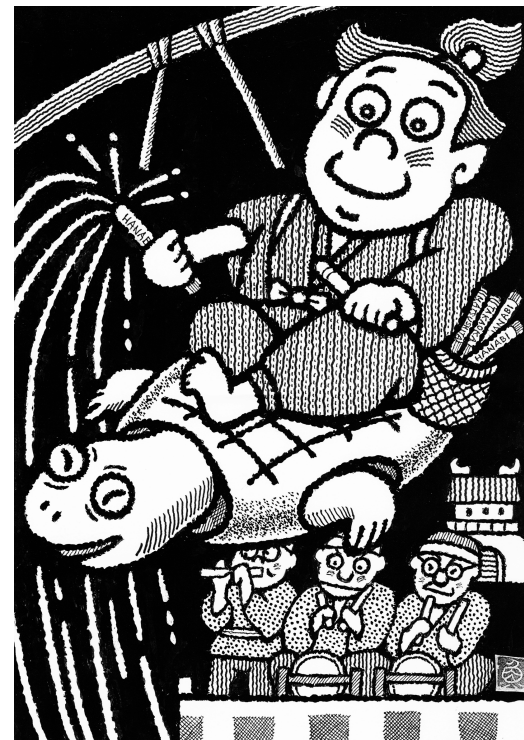


綱火 小張松下流・高岡流

つくばみらい市

つくばみらい市の旧伊奈村小張地区と高岡地区では、毎年8月に「綱火」と呼ばれる伝統芸能が開かれます。
あやつり人形と仕掛け花火を融合し、お囃子に合わせて綱を操る綱火は、一九七六(昭和51)年に国の重要無形民俗文化財に指定され、現在、小張松下流と高岡流の二流派が残っています。

小張松下流綱火は、「三本綱からくり花火」とも呼ばれ、小張城主松下石見守重綱が、戦勝祝いや犠牲者の供養のために考案したものと伝えられています。当時石見守は、火縄銃の火薬師であったと言われ、自らこのからくり花火を考案、自分の姓をとって「松下三本綱火」と名付けました。そして、家臣として仕えた大橋吉左衛門に秘法を伝授し、今に伝えられています。現在では、毎年8月24日に火難・病難除け、五穀豊穡を祈願して小張愛宕神社に奉納、小張松下流綱火保存会が保存・伝承しています。



高岡流綱火は、「あやつり人形仕掛花火」という別名があり、高岡愛宕神社の祭礼の8月下旬ごろ(今年は8月25日)に奉納されます。この綱火の起こりは江戸時代の初頭、神社の祭礼当日、境内の大木から赤と黒の蜘蛛が舞い降り空中で巣を作る様から、村人が創作したと伝えられています。

まず、地区の氏子がお囃子とともに花火を手を持ち、社殿へ火花を振りかける「繰り込み」という神事から始まり、手筒の花火によって神社は燃えんばかりの炎に包まれます。そして、地上5間(約9m)から8間(約14.4m)の高さに張った親綱を基とし、縦横に張り巡らされた数十本の綱の操作により、空中での人形芝居が演じられます。仕掛け花火を背負わせた人形を笛や太鼓に合わせて操り、花火を変化させつつ芝居場面を展開させ一つの物語にいきます。火薬の配合や技術などは秘伝とされ、現在は高岡流綱火更進団が伝統を守り続けています。

この夏、夜空を彩る神秘的な伝統芸能に込められた想いを感じてみてはいかがでしょうか。



「運ぶ」を支え、環境と未来をひらく

ISUZU 茨城いすゞ自動車株式会社

本社/〒310-0063 水戸市五軒町1-2-5 ☎029-225-1215(大代) <http://www.ibaraki-isuzu.co.jp>

いきいき茨城ゆめ国体2019 を応援しております。